

テーマ

これからの富山県 これからの人材育成

第9回 立山倶楽部会議報告

平成15年10月14日(火)

I

「立山倶楽部」

会議概要

目次

I 「立山倶楽部」 会議概要

日 程	1
参加者	2
写 真	4

II 「立山倶楽部」 会議内容

開会あいさつ	富山県知事 中沖 豊	5
趣旨説明	木村尚三郎	6
基調報告	数土 文夫	7
各参加者より	戸田奈津子	9
	マリ・クリスティーヌ	11
	望月 照彦	12
意見交換		15

日程 平成15年10月14日(火)

場所 富山全日空ホテル 飛鳥の間

テーマ 「これからの富山県 これからの人材育成」

「立山倶楽部」会議開催の趣旨

国際的に活躍されている方々から、未来への洞察、世界の潮流、人間のあり方などについて、自由かつ率直に意見交換していただくための交流の場として、平成6年から「立山倶楽部」会議を開催している。

この会議の意見交換内容から、時代を先取りする見方・考え方を県政の創造的な施策に反映させるとともに、グローバルな視点から未来を考える人材の育成に資する。加えて、参加者に「とやまファン倶楽部」の会員となっただき、全国から富山を応援していただく。

参加者



代表世話人

木村 尚三郎

東京大学名誉教授



數土 文夫

JFEスチール株式会社 代表取締役社長



戸田 奈津子

映画字幕翻訳家



マリ・クリスティーヌ

異文化コミュニケーター



望月 照彦

多摩大学大学院教授



中 沖 豊

(財)富山県ひとづくり財団理事長・富山県知事

(敬称略)

Photograph



II

「立山倶楽部」

会議内容

開 会 あ い さ つ



中 沖 豊

(財)富山県ひとづくり財団理事長

中沖理事長

大変爽やかな実りの秋を迎えておりますが、本日は木村先生をはじめ、皆様には何かとご多忙な中、ご出席いただき誠にありがとうございます。この「立山倶楽部」会議も今回で第9回を迎えますが、木村先生をはじめ皆様にご尽力をいただき年々充実してきておりまして、改めてお礼を申し上げる次第であります。

さて、富山県におきましては、富山県民新世紀計画という新しい総合計画を策定し、人材立県、生活立県、環境立県、産業立県、国際立県という5つの立県構想を掲げ、水と緑といのちが輝く元気であわせな県づくりを目指しております。これからも県民の皆さんと力を合わせて、一生懸命に努力をしていきたいと思っております。

その中でも、地域づくりは人づくりでありまして、一番重要なのはやはり人づくりと考えております。ご承知のように、昨年ノーベル化学賞を田中耕一さんが受賞されました。田中さんは富山市の出身であ

り、利根川博士も小学校から中学時代を大沢野町で暮しておられます。また神岡町で研究をされた小柴先生、高山ご出身の白川先生がおられますので、昔のプリ街道、今の国道41号は、まさにノーベル街道と思っております。

こうしたことから、人づくりに更に努力いたしたいとの思いから、財団法人富山県未来財団と財団法人富山県教育記念館を統合しまして、富山県ひとづくり財団という新しい財団を設立いたしております。本日は、「これからの富山県、これからの人材育成」をテーマに、皆さんにいろいろご意見をお伺いしたいと思っております。どうぞ忌憚のない、率直なご意見をいただきますようお願いを申し上げます。どうぞよろしくお願いいたします。



趣旨説明



木村尚三郎

東京大学名誉教授

木村代表世話人

この「立山倶楽部」会議も今回で9回目です。もともとは、富山県のこと、あるいはこれからの時代のことを、袴を脱いで、ざっくばらんに無遠慮に話をしようということで始まったものです。自由活発にご議論いただきたいと思います。

富山県は、とても暮らしやすい県で、水が美味しく、魚が美味しい。日本で家が一番大きく、ノーベル賞受賞者がぞろぞろ出てくるという不思議な県ですが、それが何故かということは、まだよくわかっていないのではないかと思います。とにもかくにも環境がよく、大変真面目。また、自然を愛しており、毎日のように立山を話題にするなど、自然との豊かな関係が富山にはあると感じます。

時代がどのように変わっていくか、それとともに富山県がこれから何をどうすべきかは、「立山倶楽部」会議の一貫したテーマです。そのもとに、観光のことや女性の役割りを考えたりしてきましたが、

今回は富山県ひとづくり財団に名前が変わったということもあり、人材育成について議論をしていきたいと思います。

今日は最初に、ご出身が富山県の JFEスチール株式会社代表取締役社長の数土さんから基調報告を頂戴しまして、その後、先ほどの紹介の順番で、10分ぐらいずつ今日のテーマ「これからの富山県、これからの人材育成」についてお話していただき、その後、またご質問などさせていただければ幸いです。それでは、最初に数土さんからよろしく願います。



基調報告



数 士 文 夫

JFEスチール株式会社 代表取締役社長

数 士

数士です。私は、1945年、4歳の時に、呉羽山の向こうの小杉町からこちら側の中町朝日村、小さい村の単位では安田というところに移りまして、高校を卒業するまで暮しておりました。日本国内はもちろん世界中どこに行っても、私の話を聞いた人からは、「富山県人ですね」「越中言葉ですね」と言われます。今、私は62歳ですが、18年間富山に暮らして、どこにいても富山県人だと認めもらえるくらい富山の体質が自分の中に染み込んでいるということに、安心もしたり、少しプライウディな気持ちになったりしています。

JFEスチールは、日本の製鉄会社第2位の日本鋼管と、第3位の川崎製鉄が経営統合してできた会社で、いろいろと名前を考えた末、JFE、Japan Future Enterpriseとしました。日本鋼管も川崎製鉄も創業100年近くの伝統のある会社ですが、日本鋼管が明治初期に設立された時に深く関わった浅野総一郎も富山出身、これを支援した安田善次郎が、私の育っ

た安田村の出身であることには縁を感じております。

本日は、人材育成という難しいテーマですが、製造業の企業経営者から見た人材という観点から、日頃私が感じている基本的な思いを紹介したいと思っています。

日本では大企業同士の合併や経営統合は大変難しいとされております。川崎製鉄は野武士の川崎製鉄、NKKは、貴族又は次男坊の日本鋼管といわれ、毛色の違った両社の統合が何故うまくいったかと言えば、両者の経営陣、あるいは従業員が、お互いに相手を尊敬し、野武士は野武士なりに、貴族は貴族なりに、相手の長所を認めあうことができたおかげだと思っています。また、サラリーマンは面白いもので、部長から「最近元気そうだな」と言われると急に元気が出てきたりするもので、様々な組織や発達段階において、相手の長所を素直に認め褒める資質はとても重要だと思います。ところが、日本では大人を褒めることが煽てるという言葉にすりかわってしまっています。子どもでさえ褒められて嬉しいのに大人が褒められて嬉しくないはずはありません。日本人はもう少し真剣に褒めることを生活手法として研究していかななくては駄目だと思っています。

我々製造業、なかでも製鉄業では、巨大な設備投資が伴うため、経営を5年、10年、15年というロングスパンで考えることが大切です。また、ビジネスの相手との信頼関係を確立することを重要視しています。長くつきあい本当にメリットを共有しようとした時には、誠実で正直でないと駄目です。最近、目の前のビジネスに目を奪われて、狡猾さやテクニックが成功の秘訣、世の中を渡っていくコツと考える方が多いかもしれませんが、これは全く逆で、誠実さや正直さというもののほどビジネスに必要なものはないと思っています。

大学は北海道大学に進みましたが、その前身札幌農学校の副校長だったクラーク博士が定められた校則は、Be gentleman、紳士たれで、これもやはり正直で誠実たれの意味と考えています。JFEスチールの企業倫理綱領は、誠実、挑戦、柔軟としていますが、これには私も非常に満足しています。

トップたるものが求められる資質として私は3つの要素があると考えています。1つ目は、自分がコミットするフィールドのテクノクラートであるということです。2つ目は、世の中が物凄く変化して行く時に、将来を展望する力、3年後、5年後、7年後、10年後の自分達の課題を設定する能力がなければならぬと思っています。3つ目には、その課題をどうやって達成するのか、実践遂行するHow to doを考えだして、それを達成する能力が必要だと思っています。これらはすべて自分自身で自己の責任において勉強しチャレンジしコミットしないと成り立たない要素だということを言いたいと思います。

少し話が変わりますが、昭和30年ぐらいまでの日本のお母さんはなかなか素晴らしかったのではないかと思います。都会でも田舎でも、学歴があろうがなかろうが、他人様には迷惑をかけないように、恥をかかさないようにと、友達の母親もみなそう言っていたと思います。人材については、社会の正しい構成員であることが一番のベースとなるのではと考えた時に、日本の母親の教育をもう一度考えてみる必要があると思います。人材教育にはいろいろな考え方がありますが、その大事なところは、原理的でシンプルなものではなかろうかと思っています。

木村 ありがとうございます。大変に素晴らしいお話を頂戴いたしました。褒めること、長所を真正面から捉えることが大事であるというお

話。そして信頼関係、誠実さが大事だということ。これは外交もそうです。フランスの外交の教科書でも「外交官は嘘をつくな、嘘をつく信用をなくす」と言っています。リーダーシップ、専門性、予見能力と実行力が大事だというお話。昔は「おかげ様で」という言い方があって、これには神仏のおかげで、世間のおかげで生かさせていただいておりますといった発想があったのではないのでしょうか。

それでは戸田さんからお願いします。

各参加者より



戸田 奈津子

映画字幕翻訳家

戸田 私は全く一人で仕事をしている人間で、人材というところからは離れたところで暮らしておりますが、映画が描くのは究極的には人間でして、そういう面ではいつも国境と言葉とを越えて様々な人達とつき合っております。もちろん、将来を担う若い皆さんに対しての責任があるわけで、そのあたりのお話を自分の経験から話したいと思えます。

先日、静岡県の高校生が書いたエッセイを読む機会がありました。最近の新聞には信じられないような若者達のホラーストーリーが出ていますが、そのエッセイを読みまして、大半の若者達はしっかりと物事を考えていることを知ることができました。ホームステイの経験などを書いた体験談でしたが、特に驚きましたのは、外国に行ったことでいかに自分が日本を知らなかったかに気づき、初めて日本の良さが分かり日本をもっと知りたいということを書いています。私はこの自分をしっかり見つめている部

分が大変頼もしいことだと思いました。また、向こうの子ども達はきっちり自己主張をし、意見を言っても負けてしまうことから、言うべきことをしっかり話したい、そのためにも語学をきっちり勉強したいということもエッセイの中に書かれていました。

私は語学が全てとは思いません。それを使って何を言うかの方がずっと重要なわけですが、とりあえず道具として語学は必要だと思います。富山県に限らず、日本全国の若い人達にとっての問題ですが、これだけ語学のことを言い、語学を勉強する道具なども進歩していながら、その割に英語を話すことは上手くなっていません。それではどうしたらいいのかということですが、私自身を振り返ってみれば、とにかく映画が好きだったので、中学で英語の勉強が始まった時に、無理にお勉強だと押しつけられなくても、好きな映画の言葉だからということで自然に英語に興味を持ちました。好奇心に引っ張られて自分から勉強し自然に身につけていったという感じです。ですから、好きなことから入っていくこと、入口のところを教育の場でもう少し考えてあげるべきではないか、好きなところから子どもを引っ張っていくこと、好きなことを周りがしっかり見つけて、育ててあげるという姿勢がとても必要ではないだろうかと思います。

今日は時間があるので、アメリカの俳優さんに関わる実例を一つお話ししたいと思います。アメリカにジム・キャリーというコメディアンがありますが、彼からとてもいい話を聞きました。「ブルース・オールマイティ」といった主演映画も上映されます。オールマイティは神様のこと、全能の神、神様になるというお話です。彼は、向こうでは超一流のコメディアンで、彼の売りは百面相です。一度隣に座ったことがありますが、本当に顔がゴムのように動き

ます。小さい時から鏡の前で百面相ばかりしていたので、親がとても心配して、「そういうバカなことはやめて」と叱られていたそうです。しかし、それが本当に好きなことだったので彼はやめなかったそうで、ところが、ある日から「面白いね。」と親が褒めてくれるようになったというわけです。ジム・キャリーは「人間の才能は、やめなさいと親が心配するようなことにこそ、その人が天から授かった才能があるのかもしれない。」と言いました。彼はまさにそれでハリウッドのトップスターになったわけです。そういう目で大人が子どもを見て、育てることができればもっと素晴らしい人達がでてくるのではないかと思います。富山にはノーベル街道があるそうですが、田中耕一さんも子ども時代は、周りが心配するくらい一つのことにはまっちゃう少年だったような感じがします。その人だけの才能をやはり育てあげなくてはいけないのではないのでしょうか。また、学校について私がいつも不思議に思いますのは、学校同士の交流というのはやっているのかしらということです。若い人達は刺激を受けているんなことを考えますから、いろんな学校が混じり合う時間を作ることで、A+Bではなくて、A×Bぐらいのものができてくるのではないかと思います。

「未来は不透明」とは木村先生の口癖ですが、インターネットで情報の交流がさらに進む未来は極めて均質的なものになり、アイデンティティを過去に見出さないと自分というものがなくなると考えられます。私は言葉を扱う仕事をしていますが、日本の各地にある豊かな言葉を大切に保存していかないと未来に自分がなくなってしまいます。過去から未来を作っていく、過去に戻って未来に行くという動きはこういう時代だからこそ必要になるのではないかと思います。その場合、自分達だけでは視野が狭く

なりますので、外部の方から見た声を聞いて新しい刺激を得ることを積極的にすることが大切ではないかと思います。

また、変化が急激な未来では、若い人同士でも10歳違ったら話が通じないというくらい世代のギャップが短く急速になっています。そうならないためには、世代が分離しないように繋げていくチェーンが必要です。事業計画などをお立てになる時には、例えば昔ピラミッドを作ったように、一代だけでは済まない何かを長期的に建設するような計画であれば、次の世代に次々に受け継がれていき、世代間のチェーンができ素晴らしい文化が残っていくのではないかと思います。

観光について私は食べ物を中心に旅行を考えますが、美味しい食べ物、美味しいお酒が富山にはあります。この頃の60~70歳の方は身体がしっかりしていますので、例えば、田植えや、葡萄の取り入れとか、稲の刈り入れなどを手伝うようなコミュニティに入っていけるような誘致の仕方が一案ではないかなと思います。

木村 ありがとうございます。映画が好きだから自然に英語が学べたというお話、大変共感いたしました。平山郁夫さんと私は同じ歳で、学校教育をほとんど受けていません。中学2年の時、今日からは学徒動員で工場で働く、英語は習わなくていいと思うと嬉しくてしょうがなかったです。好きなことから世界が広がる、外から見た発想が大事だといういいお話もありました。マリさんよろしくお祈りします。



マリ・クリスティーヌ

異文化コミュニケーター

マリ 私は日本で生まれましたが、4歳の時から父の仕事の関係でドイツ、アメリカ、イラン、タイで生活して、17歳の時に大学に入るために日本に戻って来ました。父は米軍の情報部にいましたので海外で育ったわけです。富山県とのご縁といえば、母の実家が近隣の岐阜県であったので親しみを感じておりました。私が一番最初に富山に来たのは、日本の祭りというNHKのテレビ番組にゲストで出た時でした。

1989年の湾岸戦争が始まる頃に、私はパリ・ダカールラリーにチーム監督として、アフリカに行きましたが、その飛行機で隣に座ったビジネスマンが富山の薬売りで、「アフリカは新しい大きな市場なので。」とお話でした。翌年お金を回収する時は、薬を置いた所を尋ねてもいないらしいのですが、オアシスを移動する人達なので、移動先で薬を交換しお金を貰ってまた次の村に行くということのようです。この話を聞いた時、富山県の方、薬売りの人達は嬉しいなと思いました。また、富山の人達は、次男、三男に職がなくてはいけないということで薬売りなどで生計をたてていけるようにする大変平等な県で

あるとも聞きました。薬売りの方々は、江戸時代から全国あちらこちらに出かけて、ある意味では私の父と同じ様に情報部員であったといえます。情報の切り口はとても重要で、富山県はその点では非常にベテランだと思いますので、この切り口から自分達のユニークさを形にできないか考えていくことが大事なのではと思います。

先ほどお話にてたノーベル街道ですが、ポトマック川に桜を植えた高峰譲吉さんは、消化酵素を発見された方ですが、その頃にノーベル賞があったならば、きっと彼ももらえたかもしれません。小麦の品種改良をした稲塚権次郎さんも富山県の方だったと聞いています。そのような方をもっと探し出して、どうして富山からこんなにたくさん高度なマインドを持った人達が生まれているのかということが、一つのオンリーワンになると思います。このことを分析すれば、どうすればこういう優秀な人々を育てられるのかを知る材料にもなるのではないかと思います。

富山にはいろんな顔があります。子どもの友達も連れて立山にスキーに出かけたり、夜中にほたるいかを採りに行ったりしました。立山連峰もすごく綺麗なところですし、五箇山でも昔ながらの日本の風景を見ることができます。日本人だけではなくて、海外の方々にも興味を持たれるような材料はたくさんあると思います。先ほど戸田さんがお話されましたように、語学はすごく大事だと思いますので、例えば富山県民がみんな3カ国ペラペラ喋れるように、とにかく2カ国語は最低できる子ども達を育てるといった目標などを教育委員会で掲げてもいいのではないかと思います。

木村

ありがとうございました。情報が大事であるとお話でしたが、動きながら生きた情報を採ることは、今の学校教育、教育全般に一番欠けている部分だと思います。動く時は目も耳も鼻も口も手足もみんな動いて全身で考えているわけで、それだけ生きたい情報が採れています。冗談ではなくて会社の会議も歩きながらやったらどうでしょうか。

中国映画に「山の郵便配達」という大変いい映画があります。郵便配達を引退する父親と子どもが山道歩きながら会話するその会話がとてもいいのです。「ここは山ばかりで何も無い」と言う子どもに、「何も無いとはなんだ、山の人はいろいろ考えているのだ。」と父親が応えます。雑誌にも書いたのですが、このようなやり取りが、今一番欠けていることです。これが勉強するっていうことですね。お待たせしました。望月さん、大変ユニークな発言を次々とされておられます。街づくりにおいてはピカイチの方でございます。



望月 照彦

多摩大学大学院教授

望月

私は大学で経営学をやっていますが、いかに儲かるかから、いかに生きるかを経営学で教えようといふ変わってきました。数土社長の誠実や正直、これがビジネスの基本になるのだというお話に深い感銘を受けました。それから母の存在ですが、十和田湖ほとりの新渡戸稲造記念館に行きました時、母さんからの手紙がありました。南部藩のわりと偉い武士の奥さんで教養も学問もあり、子どもを思う愛情が溢れていて、いかに人間として生きるかを、とうとうと息子に問うています。今あれだけのことを息子に言える母親がいるだろうかと思うと、母とか父の偉大さをもう一度考えなくてはいけないなと思いました。

一人ひとりの個性をどう伸ばすかというお話がありました。大学では、プレゼンテーション、自己表現、相手に伝えること相手の話を聞くことを基本的な人間の素養と考えています。最近、スローフーズがよく話題になりますが、富山はまさにスローフーズ、スローライフのメッカという感じがします。富山ライフが21世紀の良きスタンダードになるのではないかという思いがしました。マリさんのお話を

聞いて富山の薬売りは商売の原点だと思いました。今のチェーンストア理論は、マーケットを搾取し尽くしたところでパッと手を引いちゃうわけです。ところが富山の薬売りがそんなことしたら、1年後に行った時にお金を払ってくれません。むしろ富山の薬売りが来るとみんなが幸せになるという心の薬を売るといったビジネスの方法論を展開しているのではないかと思います。そのためにその地域にとってプラスになる情報を出すのでしょうか。心に響くもの地域にとってプラスになるものを売っていたのではないかと思います。これが本当のグローバルスタンダードになるのではないかと思います。

私の提案ですが、最初は富山草莽塾の設立です。先週大分県の豊国商人塾でスタートの講義をしたのですが、これは地元の企業家を育成する塾です。平松知事の一村一品運動は、One village One productとして世界的な言葉になりました。未だに世界中から見学に来る人がいますが、私は豊国商人塾をより重視しています。地域が空洞化しないように地域を支える若い企業家を育成しようと1年間で25名~30名ぐらいの人を募って10講座ぐらい勉強しています。17年間続いています。数土社長がおっしゃったように、ビジネスのノウハウではなくて産業人としての生き方を勉強しています。こちらの卒業生は500人位になっていますが、ある企業が問題を抱えると、卒業生がセーフティーネットを地域に作って支え、マーケティング力が足りないとなると活力を与えるようなことを展開しているのです。地域を支える産業人教育ということで、この人材育成が大きな成功を収めています。城山三郎さんに言わせると、安田善次郎や浅野総一郎のように富山の産業人は強靱な野生を持っていると言います。そのような人材が生まれることも、ノーベル賞学者が生まれることと同

じ土壤があるのかもしれませんが、そういう苗床をどう作るかが大事です。この会場のすぐ近くにあるフリーポケットを大学院でも地域のビジネスモデルとして研究しましたが、非常によくできており全国的にも評価されています。行政や商工会も支援していますが、街の人や市民や商工業者が知恵を出しあって、地域から若手が育つことを支援するネットワークの良い図式があります。これをもっと大きな苗床として県下に広げて行くことが考えられないか、産業風土の育成を是非考えていただきたいというのがこの富山草莽塾の提案です。ドラッカーは、日本の各地に草莽の若き獅子達がいるから、日本は絶対もう一度再生すると言っています。富山にはそういう人材がたくさんいるのではないのでしょうか。その方達が横に繋がって相互に組織ネット作りができるような環境を作っていただきたらと思います。

第2の提案は、子ども達をどう育てるかです。長浜の黒壁スクエアでは、明治33年に出来た歴史的な蔵を、市民が街のシンボルとして、マンション計画に反対しお金を出しあって保存を図りました。そこを訪ねた時、その蔵の後ろでは、竹箒や塵取りを持った子ども達が一心に掃除をしていました。総合の学習で、「自分達をもっと積極的に街に出ることをみんなで考えてみよう」という校長先生の投げかけに対して、3年生の子ども達が、「街を綺麗にすることを自分達でやろう」と考えて取り組んでいるのです。他のクラスでは、観光を支えたいと、自分達で書いた地図を昼休みに、街の中心に出かけて配っています。その地図をもらって捨てる人は一人もいません。大事な宝物として皆持ち帰り、リピーターになります。長浜について私が書いた記事を送ったところ、「……長浜大好きの勉強で、街や商店街や曳き山祭りのことを調べたり、街の人やお年寄りから

話を聞いたりして、勉強してきました。長浜のことがよく分かったし、大好きになりました。観光客の人も望月先生も何回も長浜に来てくださって、僕は嬉しかったです。これからは僕は街を綺麗にしていきたいです。そして僕は大きくなったら画家になって、長浜城や長浜の街を絵に書いて、いろんな人に見てもらいたいです。今度長浜に来られたら、長浜小学校に来て下さい。」といった手紙を貰いまして、「こういう手紙を富山の子どもからももらえたらいいな。」と思っています。財団では、「きらめき未来塾」といった創造性教育に取り組んでおられることを聞きました。創造力、エスプリもとても大切です。それらに加えて、私が一番大事だと思うのは郷土愛、郷土に対する誇りと愛情だと思います。「きらめき未来塾」を是非成功させて、同時に子ども達が地域を愛する塾とかネットワーク[富山子ども未来クラブ]のようなものをつくってもらったらと思います。子ども達の心と頭の中に富山の未来があるのです。子ども達が、富山をどう考えて、自分達の街、自分達の地域、自分達の学校、自分達の先生をどう考えるかが未来なのです。子ども達が、ここ富山でしっかりした企業家になろう、画家になろう、富山を拠点に世界的なグローバルなことをやろうと考えたならば富山の未来は本当に明るいと思います。木村先生は「振り返れば未来」とよくお話になられます。この前、イギリスに行きましたら、中心市街地を再生する組織があり、空き店舗対策などではなく、地域の有識者と子ども達が地域を見て、歴史や文化を学び、それを誇りに思う教育を提供していました。郷土を愛すること、歴史や文化を振り返れば未来ということを子ども達にもしっかりと教えることが大切ではないかというのが2つ目の提案です。

第3は、富山「私達の誇り」アカデミーネットワ

ークの提案です。イギリスには ATOMという地域産業や文化を再生する組織が300ヶ所くらいあります。市民や専門家が集まって自分達の地域社会や文化や子どもの教育をどうやって再生していくかということをやっています。そのロンドンにある本部を、昨年、20人ぐらいの地方自治体の行政マンを連れて訪れました。今、イギリスは、街が綺麗で、元気で、観光客がたくさん来ています。団員の一人が、2時間ぐらいのプレゼンテーションを受けた後、「イギリスの街では、お年寄りも若い人もみんな背筋をピッと伸ばして歩いている。ハツラツとしている。何故こんなに元気になったのか一言で言うと何なのでしょう。」と質問したのです。素晴らしい質問だと思ったのですが、プレゼンテーションしてくれた女性はパッと胸を張って、「それは自分の地域への誇りです。」と言いました。彼女は City prideと言いましたが、自分の街への誇りを持つことが、街や文化や、産業を元気にした最大のポイントだったのです。いかに自分達の地域社会を見直して、良い所見つけ、それをどう育てるかを、親子で議論しながら、自分の産業や文化を再生することに挑戦していくと、子どもが地域に残ってもっとその街をいいものにしようと思い、挑戦する気持ちを持つわけです。このような訳で、小学校の総合学習などを上手く使いながら、富山県で地域のプライドを育てるネットワーク化ができないだろうかと思っています。よそから来る子ども達に自分の街を案内する時には、自分の街の良い所を探して相手に訴えようとするし、駄目な所はなんとか良くしようと思います。是非自分達の地域を学び、そこから未来を作って行く富山「私達の誇り」プライドアカデミーネットワークと呼べるようなものが出来れば、その地域にいる人全体が素晴らしい成長を遂げるような期待が持てるのではない

かと思えます。

21世紀、私達は人間の幸せを求めて旅をすることになるでしょう。巨大な摩天楼ではなく、小さなコミュニティの小さな住まいの小さな窓辺に幸福を探す旅です。ディズニーランドに行ってコースターに乗って大騒ぎするのではなくて、ある地域を訪れてそこにあるしみじみとした生活の実感に触れることか一番自分が生きるうえでの糧になるような富山づくりをしてもらいたいと思います。

私は10年前に「しあわせ富山」という提案をこのような会でした。富山では「しあわせ」という言葉をお使いいただいておりますが、その10年前の提案がまだ生きていたと思います。今回は、しあわせ富山ルネサンスという3つの提言です。

木村 ありがとうございます。大変中味の濃いお話で、大勢の人に聞かせたかったですね。ここで10分ぐらい休憩し、その後、皆様方からもう少しお話をお聞かせいただければと思います。数土社長さんには、将来を展望する力をどのように身につけることができるのかについて話を伺えればと思います。JTBの調査では一番外国旅行に行きたくないのが20代の男性でして、戸田さんには、そのような無気力な若い人達の頭をしゃんとさせるにはどうすればいいのか。マリさんからは、人材育成の中の一つ大事なポイントとしてコミュニケーション能力を育てるにはどうしたらいいのかをご経験に基づいてお話いただければなと思います。

日本中、年寄りの介護は一生懸命やりますが、意外に子どもは無視されていて、国の予算でもわずかな割合しかないのが事実です。自分の街なり地域なり、プライドを持つような子どもを育てるのは本当にそのとおりだと思います。子どもからのメッセー

ジで感動されたお話がありました望月さんからは、日本の今の子ども達へのメッセージを聞かせいただければと思います。

意見交換

木村 数土社長からお願いします。

数土 今日は私だけが企業の経営者ということで、企業の経営者という立場から人材育成や人材に対してどのような考えを持っているかをお話しました。トップの求められる資質として、テクノクラートであること、将来展望する能力を持つこと、解決するための実戦力を持つことの3点をお話しましたが、私が言いたかったことはこの3つすべて自己の責任において挑戦し実践していかなくては駄目なことだということです。将来展望をどうするかについては私なりの考えをお話ししますが、それ以前に、将来展望をやってみせない、当たらないことを恐れて、言質をとられないような喋り方しなくてリーダーといえるかということがあります。間違っていると思ったらいつでも直すことができます。朝礼暮改、朝礼朝改かもしれませんが、挑戦しないことには始まりません。とはいっても、いつも展望が外れていては、誰も相手にしなくなるわけで、私も、いかに将来を展望するかについては自分なりに一生懸命勉強してきたつもりです。

その1つは、やはり物事を短期的に見ないこと、3年後、5年後、7年後にどうなっているだろうかとロングスパンで見ることです。2つ目は、自分の

立場を換えて、例えば、自分が別の部長になったらどうするだろうか。あるいは、私が新日鉄の社長だったら、USスチールの社長だったらどういう戦略をとるだろうかと考えてみることです。中国の古典でも隣の国の宰相はどういう戦略をとるかという見方が出てきます。人間の行動のパターンは、5,000年の歴史の中にほとんど載ってしまっています。どうして何回も同じ過ちを繰り返すのかといったことをしているわけで、やはり歴史を勉強しないと駄目です。実際に私は経営に携わっていて、今と同じシーンが三国志のあの場面に出てきたとか、十八史略のこの場面にでてきたと時々感じているのです。また、いろんな人とコミュニケーションの機会を見つけて勉強することだと思います。しかし、何より一番大事なことは分からない将来を展望してみせると、それが駄目だったらまた自分で再構築し直すことを繰り返すことだと思います。展望を持たないのは、経営権の放棄だと思います。

木村

ありがとうございました。大変素晴らしいお話を頂戴しました。戸田さんどうぞ。

戸田

私への質問はとても難しく、これに答えができれば日本人は苦労しないという感じがします。確かに最近の若い男性に覇気がなくなっていますが、人間は20代でエネルギーが無くなってしまふような動物とは思えません。それがこうなっているのは教育がどこかおかしいからで、もちろん親の教育と学校の教育両方があると思います。とにかく過保護すぎて、少子化が進むと更にそれがひどくなるわけでとても怖いと思います。

仕事から外国の映画監督や俳優に会いますが、10代の俳優も大勢来ます。彼らが日本の若者と決定的

に違うのは甘ったれていないということです。外国で一流になる人は、例えばスビルバーグとかずば抜けた人は、10代に自分のやるべき道を見つけています。そしてやはり非常な努力をして勉強をしているわけです。その大事な時期に覇気がないというのは全く暗澹たることで、我々日本人が抱えている本当に大きな根本的な問題だと思います。家庭の躰の問題それから学校システムの問題ですね。問題があまりにも大きすぎるので、いかに自分達や自分の兄弟に誇りが持てるかという話をしますと、先日イヌイットのドキュメンタリー映画を観ました。これまでイヌイットの映画はなかったのですが、イヌイットの人達が自分達の過去を描いた映画です。昔の道具から言葉までを再現して、俳優は全部昔の言葉を喋ります。大変長い映画でしたが、一番素晴らしいのは、作った若い人達が、映画を作ることを通じて自分達の歴史を知り、自分達の誇りを再認識したことです。このように過去を掘り起こすのに映画がとても役立つことを、イヌイットの映画が示してくれました。このような映像の使い方、それによって過去への誇りを取り戻すこともできるのだということを一つの例としてお伝えしたのです。

木村

ありがとうございました。先ほどは外国へのホームスティが大事だというお話でしたが、今度は過去へのホームスティですね。

数士

今のお話に絡めて、若い人達が外国に出ることを嫌がっている社会現象のベースにあるものが何かと考えると、何故だかはわかりませんが、ここ数十年の間に、日本人が人とのコンフリクション、摩擦を大変恐れるようになったことが原因としてあると思います。世の中にはコンフリ

クションがあるのが当たり前で、コンフリクションをおこしたら、それをどうやって解決して、仲良くなり、合意に達するか、これが人間の生活の基本になります。しかし、コンフリクションが起こる事が、悪いことのように日本人には生活習慣として教育されてしまっており、自分でもそういう感情を作っています。これはもう大変な状況で、コンフリクションを起してもそれに耐えられること、コンフリクションを起してみせるという小さな勇気、このわずかな勇気さえ失ってしまっています。

戸田 外国に行きたがらないだけでなく、玄関から出たがらないですよ。家族とも。

数土 外国に行きたがらないどころか、他人と遊ぶことも出来なくなっています。やはり子ども達にどうやって勇気を持たせるか。楽しく他人という環境を作って、成功体験を教えないと、どうもならないと思います。ちょっと飛び入りしてどうもすみません。

木村 自分が傷つくのが怖いんですね。

数土 これらをのりこえる小さな勇気、これを持たせてやらないと駄目ですね。

木村 そのとおりだと思います。マリさんどうぞ。

マリ 第二次世界大戦後、アメリカの60年代は、ベトナム戦争ですごく自信が失われた時期ですが、大きな変革の時代でもありました。黒人と白人との対立の差別的な状況の中でやってきた

ことは、セルフスティーム教育、誇り教育なのです。少数派であることに対してセルフスティームはとても重要で、自分に対する誇りを身に付けつけるには、誇りを持てる要素が必要だということで、アメリカの学校教育の中に初めてブラックヒストリーが取り入れられるようになったのです。黒人のセルフスティーム教育が始まると、今度は、先住民であるアメリカインディアンも、彼らの文化やルーツを掘り起こして豊かな文化を皆に伝えて認められるようにしようとした。

日本語でセルフスティームというと女性の話という感じですが、子どもにとってのセルフスティームが今すごくクローズアップされています。子ども達が自分は価値のある人間なのだとすることを認識するために、学校教育の中にどうやってセルフスティーム教育を継続性を持ちながら取り入れていくかはとても大事だと思います。富山県がどれだけ世界に誇れる人材を送り出してきたか、どれだけ世界に素晴らしい技術を送り出しているかということで、県民のセルフスティームも高まることになります。先ほどお話にあった浅野さんや安田さん、それから松竹の大谷さん、日活の創立者も富山県の方ではなかったかと思います。YKKの吉田忠雄さんとか綿貫衆議院議長も、社会的にすごく貢献した方とか、社会を助けた方とか紹介することがすごく大事なことだと思います。

セルフスティーム教育の原点っていうのは、自分達が自慢できることをどれだけ大勢の方々に共有してもらえるかによって、相手にも認めてもらえることになるわけです。私が富山によく来るのは万葉の会に参加してからです。この前、大伴旅人というすごくお酒の好きな方が、自分が死んだら自分を焼いてその灰で骨壺にして、その中にお酒を入れてもら

えれば、ずっと灰になってもお酒が飲めるという、それほどお酒が好きであった話をお聞きしましたが、他の国に同じような話がありイギリスで英訳されたものを日本語に訳したのが小泉八雲さんです。今、ラフカディオ・ハーンのほとんどの資料が富山大学に集まっていて、大伴旅人の息子の大伴家持が富山県知事にもなっています。このようにこじつけでも話題づくりをして、それでもって富山県をアピールするといった材料を多く持つことが大切です。コミュニケーションの原点は、似た所、共有し合える物を見つけようとするにあって、共通点をたくさん見つけそれを発信することです。

木村 こじつけでもとにもかくにも同じ所を探しあてること、よく分かります。フランスの汽車に乗った時に前に座った人としばらく睨めっこしていたのですが、どうも教師らしくて「月給いくらなの」なんて話から友達になったのです。確かに、共通項を探すのは大事なことです。

望月 マリさんの偉人伝を作ったらというお話に関連して、私のゼミでは3年に歴史上の人物についての伝記を書く課題をだしています。3ヶ月ぐらいかけますが、データだけではなく人間の内面に踏み込んで書くことを求めると学生は大きく変わります。富山の子ども達が自分の好きな人物の物語を書いたものを集めたりすると、専門家がやるよりもずっと面白い人間論が、子ども達の手によって作られるのではないかと思います。

木村先生からのご質問は、先程の話とは逆に、大人から子どもをどう見るか、子どもにどのようなメッセージを送るかということでした。私はここで実際にあった話を一つ紹介したいと思います。

栃木県の足利市にココファームという大変注目をされているところがあります。もともとは、こころみ学園という社会福祉法人で、今八十数歳とご高齢ですがものすごく元気な川田昇先生がはじめられました。先生は、昭和30年代、30代の頃に、知的障害などを持った子ども達の学級の担任として、子ども達を愛情いっぱい育てられたのですが、小学校を卒業して中学校へ行き社会に出ると、「先生、僕はもう明日から来なくていいと言われちゃった。」と泣いて訪ねてきたそうです。そこで、こんなに心根の良い子が社会で受け入れられないとすれば、自分が彼らを受け入れる施設を作ろうと決心し、実家が造り酒屋で結構持っていた田畑を兄弟の了承を貰って売り払い、足利の山奥に子ども達が伸び伸びできるなるべく広い土地をもとめられました。そこに、知的障害を持っている子ども達を30人引き受けて、川田先生の考え方に賛同した9人の職員が1年間無給で働いて、自分達で開墾して、建物を建て、お金が尽きると、職員が土方にでて、その日稼いだお金を皆出して、これを味噌代、これはコンクリート代と始めたわけです。その後、斜面の開墾を子ども達と一緒にすることに挑戦します。30度の傾いた所で、木を切り倒したり、一輪車で石を運んだりしているのを見て「これは強制労働だ訴える。」と言い出すお母さんも出てくるわけですが、川田先生は、「3ヵ月後に彼らの姿を見に来てください。」と言うのです。知的障害の子は家の中に隠されるように育てられることが多く、運動をしないため筋肉が無く食べるとドロドロと排泄しますが、3ヵ月後になると筋肉がついてきてウンチがコロコロしてきます。半年後には自分で調整できるようになるのです。それが一つの狙いだったのです。

また、自閉症で一度も家族と話したことの無い男

の子は、一人置いていかれるのも困るので、腰におにぎりを下げて一緒に山に登り、昼の時間になると、風がこないようにトタンで囲って、飯盒でお味噌汁を炊いてみんなで分けて食べるのだそうです。そうするとだんだん心が開いてきて、労働基準局に訴えと言ったお母さんが訪ねてきて二人で紅茶を飲みだした時に、お母さんを見て初めて言った言葉が、「ママ、美味しいね。ママ、美味しいね。」でした。お母さんはワァーと泣き出して「今まで一度も心を開いて話したことのない子が、どうして今日こんなふうに話ができただけなのでしょうか。」と問いかけたのに対し、川田先生が答えられたお話を思い出して5つのポイントを紹介します。

1つ目はやはり深い愛情を持って子どもに対応するということです。2つ目は、極限的な状況の中に子どもが居たということです。子ども達も急な斜面で自分が誤って岩を落とすと下の子が怪我をすることが分かるのです。そのことが、自分の殻に閉じこもっていた子どもの意識を外側に広げていくきっかけになっています。また、一輪車を斜面で使うことで脳に大変な刺激を与え、平衡感覚が戻って意識も正常化をしていくのです。3つ目は、自分に責任を持つ気持ちが芽生えることです。この木は今日中に切り倒さなくてはと考えるようになると、「はい5時で終わりですよ。」と職員がいても、「もうちょっとやるよ。」と自分達でやるようになってくるのです。4つ目が、生み出す喜びです。切り倒した木で椎茸栽培をしましたがこれがなかなか上手くいかず、結局、川田先生の家が造り酒屋であったこともあり、ワイン作りに挑戦するのですが、この時ちょうどアメリカからブルースさんという優れた醸造技術者が半年契約でやってきて、子ども達が一生懸命やる姿に感動して全面的に協力するわけです。彼はその後

日本国籍を取り今も足利に暮らしています。そのためワインの質が上がっています。生物を育てるなど生み出すことの喜びを知るとというのが4つ目です。最後に5つ目はやはり具体的なサポートをしてあげなくてはなりません。数年前大嵐が来まして、葡萄を袋で包んでいる最終段階で全部だめになったのです。さすがに職員も川田先生もガックリしていたら、子ども達が隊列を組んで山に登って行き、「先生、袋を全部拾い集めたら来年使えるよ。」と一つ一つ集めている姿をみて、「子ども達に教わった。こんなことをしてはいけないのだ。」と頑張りだすことができたのだそうです。

子ども達は、ワインの売上があることから、毎月少ないけど貰える給料を貯めて、年とったお母さんや、お父さんを園の近くにある農家の空家に呼び寄せています。一番心配していた子ども達がお父さんやお母さんと一緒に暮らしています。こういうことを私はココファームという施設から学びました。

木村 ありがとうございます。聞き惚れているうちに終わりの時間が近づいて参りました。今日は、例年に比べて格段に素晴らしいお話を頂戴したと思っています。数土さんのトップたる者、自分の責任で自信をもって道を示すことが大事であるというお話は本当にそのとおりだと思います。そのためにご自分なりに苦労された成功体験がもとになっているものと思いました。経験することといえば、土と親しむということは、全身で感じ全身で考えるという意味で最高の経験になるものと思います。明治以降の先人にも多かれ少なかれ農業体験が基礎にあるのではないのでしょうか。また、農業でなくても、例えばラテン語など苦しみの中でマスターしたという気持ちが、将来何をやるにしても大きな支え

になるのだと思う。戸田さんがお話された自分なりに好きなことに糸口を見つけて取り組むことはやはり大事ですね。ホームスティもアジアやアフリカなどにも留学させたらいいのではないのでしょうか。マリさんのこじつけでもいいからお互いの共通点を探せというのは、外交官にとって一番大切なことのように思います。相手の国の言葉でその土地の民謡などを歌うと、だいたいうち溶け合えるようです。歌といえば、エストニアに第二の国家として歌われる「わが祖国、わが愛」という歌があって、「わが祖国の痛みは私の心を煮えたぎらせる、わが祖国の喜びは私にとっての歓喜。わが祖国、わが祖国。わが祖国。」というとても良い歌です。小さな国で、周りの国々から痛めつけられただけに、郷土や国への愛が強くて、子どもも歌っていますが、こういう自分の国土を愛する歌が、日本でも、富山県からも作ってもらえるといいなと思いますね。

望月さんのお話から、子ども達との交流が大事だということがよく分かりました。私の教え子が、幼稚園で子どもと一緒に農作業をしたことで、今まで口を聞くことがなかった親同士のコミュニケーションができた喜んでいました。土に触れるというのはそういう力を持っているのです。もう一度原点に帰って、大地から私達の命の成長、心と身体の成長を考え直す必要があるのではないか、人材育成の根本のところをもう一度掘り起こして見る必要があるのではないかとお話伺いまして大変に強く感じました。本当にどうもありがとうございました。

中沖知事さん、一言印象なりお考えをいかかですか。

中 沖

木村先生から急に話を向けられましたが、本当に素晴らしいご意見ばかりで、これが

らの県政に是非反映させるように努力したいと思います。今後とも末永く、ご指導ご鞭撻をお願いします。

これからの富山県の問題としましては、国内的な面からは、元気であわせな県づくりを目指しております。国際的な面では、日本海に面していることでもありまして、環日本海交流の国際拠点づくりを目指しているわけですが、やはり地域づくりは人づくりだと思っております。これからさらにこの人材育成について努力していきたいと思っております。

富山県にはいろいろな特色がありますが、人材輩出県、人材県だと私は思っております。安田善次郎や高峰譲吉、あるいは松村謙三、正力松太郎、それから吉田忠雄さんなど、いろんな素晴らしい人材が出ております。富山県ひとづくり財団でも、富山の生んだ素晴らしい人材を紹介する展示と図書を考えております。すでに刊行されたものもありますが、先ほどのお話のように、人間的な面を含めて富山県の人材について記述する本を出したいと考えているわけです。今日は本当に素晴らしいご意見ありがとうございました。心からお礼を申し上げます。先生どうもありがとうございました。

「立山倶楽部」 会議テーマ

	実施時期	実施場所	テーマ
第1回	平成 6年 6月 18・19日	立山高原ホテル	とやまから 21世紀
	木村尚三郎、伊勢彦信、大浦 溥、黒木靖夫、今野由梨、鈴木忠志 佃 一輝、山本卓眞		
第2回	平成 7年 7月 25・26日	宇奈月国際会館	とやまから 21世紀 ～とやまから世界へ～
	木村尚三郎、伊勢彦信、大河原愛子、楠田 實、高坂正堯、今野由梨 東郷茂彦、中條高德、山本卓眞		
第3回	平成 8年 10月 3・4日	立山高原ホテル	とやまから 21世紀 ～ゆとりと豊かさの質を問う～
	木村尚三郎、伊勢彦信、今野由梨、丸田頼一、森下慶子、山本卓眞 湯川れい子、吉岡 明、吉田光男		
第4回	平成 9年 10月 1・2日	立山高原ホテル	とやまから 21世紀 ～文化と交流の時代へ～
	木村尚三郎、青木 保、猪口 孝、北本正孟、福原義春、松岡正剛 丸山茂徳、森 洋子		
第5回	平成 10年 10月 6日	宇奈月国際会館	とやまから 21世紀 ～そうだ、とやまへ行こう～
	木村尚三郎、島森路子、福原義春、丸山茂徳、涌井雅之		
第6回	平成 11年 11月 18日	富山国際会議場	とやまから 21世紀 ～21世紀の女性そしてとやま～
	木村尚三郎、赤井士郎、岡本真佐子、佐伯順子、野村乙美、宮下孝晴		
第7回	平成 13年 10月 11日	黒部市国際文化センター	21世紀のとやま像 ～住んでよし、訪れてよしの富山県づくり～
	木村尚三郎、石鍋 裕、白石真澄、深井晃子、吉田忠裕		
第8回	平成 14年 10月 15日	富山全日空ホテル	富山を世界の舞台に
	木村尚三郎、片倉もとこ、セーラ・マリ・カミングス、谷口 侑、野村万之丞		
第9回	平成 15年 10月 14日	富山全日空ホテル	これからの富山県 これからの人材育成
	木村尚三郎、数土文夫、戸田奈津子、マリ・クリスティーン、望月照彦		

財団法人 富山県ひとつづくり財団

〒930-0018 富山市千歳町1-5-1(富山県教育記念館2階)
TEL.076-444-2000/FAX.076-444-2001